

## 日本気象学会2001年度秋季大会シンポジウム 「東海豪雨—自然・都市・人間の関わり—」報告

### はじめに

田 中 浩\*

2000年9月11日に名古屋を中心に起こった「東海豪雨」は稀有の出来事であった。実は私の車もこの豪雨に巻き込まれて冠水の憂き目に遭ったのでこの出来事はけっして忘れることができない。代理店にいわれるままに車に災害保険が掛けてあったことはまことに幸運であった。保険会社は大損したが自動車会社は大もうけしたことになる。保険を掛けてなかった冠水車も多かったが不運というしかない。私はこの事態を通じて自然と人為の不思議な関わりを感じ、この豪雨を単に自然現象として捉えるだけでなく、人間要素を組み込んだテーマで議論が行われることを期待するようになった。

名古屋を流れる新川の堤防が決壊して枇杷島町が広域にわたって浸水した。名古屋を流れるもう1つの川である天白川からも水があふれ野波地区を中心に浸水

した。どちらも大きな川ではなかったことが急激な増水をもたらしたといえよう。500 mm を越える降水量に対しては決壊は当然との見方も少なくない。治水は文明度に対する1つの指標であるが、逆に都市という文明の結晶が災害をもたらすというのも現代の皮肉である。

本シンポジウムを設定するにあたり、気象学会中部支部で検討が行われ表題のテーマが決定した。シンポジウム前半は東海豪雨の気象学的解明に関する3つの発表があり、それぞれの立場から東海豪雨の実態と原因についての力作が並んでいる。後半は工学的立場からの災害因果論および災害文明論が述べられ議論に厚みを添えている。どんな豪雨であっても人間がいなければ災害もないし、気象学的にも大きな意味が付与されることはないであろう。

---

\* 名古屋大学大学院環境学研究所。

—2002年2月20日受領—

—2002年6月19日受理—

(Report on the Symposium of MSJ Fall-Meeting 2001)  
“Tokai Gouu Heavy Rainfall—Nature, Urbanization and People—”

Hiroshi TANAKA\*

\* *Graduate School of Environmental Studies, Division of Earth and Environmental Sciences,  
Department for Atmospheric-Hydrospheric Science, Nagoya University, Chikusa-ku,  
Nagoya 464-8601, Japan.*

*E-mail : tanh@ihas.nagoya-u.ac.jp*

(Received 20 February 2002 ; Accepted 19 June 2002)

Contents

1. Shinji WATANABE : Observation and Analysis of Heavy Rainfall in Tokai.
  2. Sachie KANADA, Kazuhisa TSUBOKI and Takao AKEDA : Structure and Evolution of Extremely Heavy Rainfall—Producing Convective Line—System.
  3. Teruyuki KATO : Modeling and Forecast of Heavy Rainfall—Approach with Numerical Models—.
  4. Yoshiaki KAWATA : Tokai Heavy Rainfall Disasters and New Challenge for Disaster Reduction.
  5. Taikan OKI : Flood and Flood Damage—Interactions between Humans and Nature Systems—.
-